大佛次郎

その人 最後の旗本

徳間文庫

その人 最後の旗本

© Masako Nojiri 1990

㊐-14-32

著者 大佛次郎
発行者 荒井修
発行所 株式会社徳間書店
東京都港区新橋四-一〇 〒一〇五
電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四-四四三九二番
印刷 凸版印刷株式会社
製本 〃

1990年8月15日 初刷

〈編集担当 前島不二雄〉

ISBN4-19-599138-2 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

その人 最後の旗本

大 佛 次 郎

目次

お高祖頭巾 5
寒月 16
枯野 29
梅 56
やみ 71
混乱 98
秋天 127
春の日 141
夜の光 166
初夏 191
花 224

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

二つの世界　245
夜光虫　275
消えぬ過去　308
七月の夜　328
それから　361
解説　福島行一　371

お高祖頭巾

新しい年がすぐ目の前に来て、京の町も活気を見せ始めていた。松飾りも出た。春の仕入れで、品物も店にあふれているし、せいもん払いで景気をつけ、人出も多い。

だが、これは、寺町通り古本店であった。出入口だけあけて、往来に向いた障子も閉め、そこの縁に並べた端物の三文本に、風のいたずらを防いで重しを置いただけで、冬日に薄暗い店の奥は、人の気配もないように静かである。外に出した行燈形の看板も古いのである。

一人の若い武士が、つと、この店に入った。

土間に立つと、店の畳に積み上げた本の間から、咳ばらいして、人間の声が聞えた。

「お越しやす」

夕方近かったが、外の光の中を歩いて来た目には、屋内は暗い。声の主は火鉢を抱えて老眼鏡をかけ、古障子越しの光でなにか本をひらいて見ていた顔を上げただけである。

客の武士は、二十代の男で、時折、この店に姿を見せたが、二条の城に江戸から来ている旗本らしく、どういう役をしているひとか、本が好きである。忌味のない男らしい顔立で、行儀よく袴をはいた丈長の姿は、町の女が振向いて見るくらいに若々しい魅力を示していた。

「今日は、また、冷えるなあ」
と、店さきの火鉢に、手をかざしながら明るい声で言った。
「もう春だと申すのに」
「ほんまどす」
別に無愛想なのではなく、紙魚だらけの古い本ばかりと毎日を暮していると、人間相手のように口をきく習慣を失くすものらしい。眉に長寿の相のある品のよい老人である。春といえば、上りがまちのところに小さい水鉢が出ていて、水仙のつぼみが葉の間に見える。よけいな世辞もいわず、もの静かで口数すくないこの店番に、若者は好意を感じている。
「なにか、あるかな？」
と、ひとりごとのように、つぶやいて、棚に積み上げてある本の書名をながめているらしかったが、ふと、その視線を、自分が入って来た出入口の外の往来に向けた。
名物の時雨模様で、時々、冷たくかげっては冬日和らしく美しく明るくなる町にいかにも歳の暮れらしいあわただしい人の往来が見えた。その中から、ひとりの男がこの土間を覗き込むようにして立ち去りかけたのが、若者が、顔を向けていると知って、逃げるように通って行ったのを見た。
「やはり、あいつだ！」
と、若者は思った。
後を尾けられているような気がしたから、念のために、この店に入って様子を見ることにし

たのである。
遊び人のように見えるその男は、二条の陣屋にも出入りを許されていた町方の密偵であった。
若者は、なにもなかった様子で、瞳を棚の本にもどした。
（まさか、俺を縛るつもりではあるまい）
こう思い返しながら、静かであった。
別の棚の前、畳の上におびただしい本が幾重ねも積み上げてあった。和綴の本のことで、かさ高である。そろったものは、細い紐でくくってある。これには、書名を墨で記した紙札も付けてないし、代価も書いてない。
新しく買い入れたばかりのものと見えた。
「ちょっと、見せてもらうぞ」
「どうぞ」
どこの家から出たものか、まとまっていろいろの本がある。漢籍が多いのだが、日本で版行されたもののほかに、海の外の明時代の古い版のものまで見当った。歳末の金が入用で手放したのかも知れないが、よほどの読書人が集めたものらしく、どの本も新しいもののように保存がいいのは、もとの持主が、よほど大切にして来たものである。
「これは、珍しいものが、いろいろとあるではないか？」
と、若者は、感嘆した。
「私などが、書名も初めて見るようなものがある。詩の本が多いな。それも、明板のものな

ど……」

「へえ、近ごろの出もので」

と、亭主が奥から出て来て答えた。小さい茶碗に、煎茶を入れて来てくれたのであった。

「粗茶で」

「王次回の詩などとは、私は新潟の館柳湾先生の唐詩の中に抜いてあるのを読んだだけだが、この疑雨集は唐土の板だ」

欲しいと思ったが、本など買っている時期ではないと知っていた。けわしい形勢が明日にもこの京都から立ち去ることになるかも知れぬ毎日なのである。現に、たったいま、自分の動静をうかがって、町方の密偵が、おかしな挙動を見せたばかりのところである。

「この値段は、わかっているのか？」

「いや、あいにくと……まだ、手前どもへお下げ渡し願うただけどして。ひょっとしますと、お買いもどしにならはるかも知れまへん。それで、まあ、……こうやって、ねきにのけとりますが……」

手放したくないものを手放したものとわかって、どこから出たものか、と尋くのは、礼儀ではなかった。また尋いたところで、売り手の名をあかす亭主でもないらしい。

「さすがに、京じゃ」

と、武士はいった。

「これだけの書籍を持った仁が、隠れておられる。見せてだけもらうかな」

「どうぞ。どうぞ。ごゆるり、御覧くださりませ」
その間にも、家の内部の夕方の色は、濃くなって来た。
人が外から入って来る気配に、若者が振向くと、薄暗い光に慣れていた目にあでやかに、なにか浅黄色の塊が見えて、入口の障子のかげに、隠れた、女の手が動いていた。浅黄色は、かぶっていたお高祖頭巾で、戸口でそれを脱いだのである。
武家の女房と、はっきりわかる。それも、土地の者ではなく江戸の人間と、ひと目で知れて、若者は目を上げた。
先客があったのに、どことなく遠慮も働いたらしく、若者に会釈したが、はだの色が目立って白い顔に微かに動揺が見えた。ぽってり肉のゆたかな顔立が京おんなとは違う美人であった。
「釘宮から出ました」
若者は、目を外らして、江戸前の、はっきりした声を背中に聞いた。
「昨日の本でございますが、夫も差上げてよいと申しましたから……お話のようにお計らい下さいまし」
「それは、まア……わざわざお越し下さいまして」
という言葉を、亭主は、京言葉で丁寧に挨拶した。
「お使いで結構でございましたものを」
「いいえ、ついでもございましたから」
「それでは……ちょっと、お待ち下さりませ。こちらから、お届け申し上げるのでございます

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

が、お差し支えなかったら、残りの分を、ただいま、お受取り願いますから」
若者は立って出て行く機会を失くしていたが、ふと、自分の役目に気がついて、念のために話しかけてみようと思い立った。
「失礼ですが、江戸の方でございますか」
女房は、驚いたように目を上げた。
「あなた様も」
黒い瞳の、明るい表情であった。
「二条の陣屋の小場小四郎と申す者ですが」
「それは！」
と、形をあらためて、
「二条の組屋敷におります釘宮重蔵の家内でございます。御見知りおき下さいまし」
「組屋敷に？」
若者、――小場小四郎は、いっそう、意外に感じて美しい相手を見まもった。
「まだ、……こちらに残っておいでなさる？　御主人も御一緒でございますか？」
四囲の情勢から大政を奉還した将軍慶喜が、部下が不穏で、どんな事態を生むかわからなくなったのを見て、この月の十二日夜、二条城を出て大坂城へ退去するとともに、旗本ばかりでなく、幕府方の会津も桑名も、一兵も留めぬくらいに京都から引き払って行った後であった。
江戸の人間は、小四郎がその一人だったが、情勢を見て連絡するように、ひそかに残された小

人数の者のほかは、居残っていないはずだったのである。いわば、いまの京都は、幕府方から見て敵地も同然であった。

「それが……」

と、釘宮の妻女は答えた。

「急いで、大坂表へまいるように、とお上から御下知も頂きましたが、あいにくと夫が長い患いでふせっておりまして、お医者さまも動かしては危ないと仰せられましたので、……皆さまがお引揚げなさいますものを、私どもだけ残って、どうなることかと心配でございましたが、運を天にまかせると申しまするか、あきらめて、当地に留まっておりまする」

「それは、またお気の毒な」

と、小場小四郎は、心から挨拶した。

「あいにくの場合で、なんとか御不自由でござろう。それで、御病人は、組屋敷の方で、おやすみになっておられる？」

「はい、ただいまのところは」

と、言ったのは、出来れば、よそへ移りたいらしかった。

「御承知のとおり、どちら様もお引き払い遊ばして、お隣近所急に空家ばかりとなった中に、私どもだけ残ったことでございまして……心細くもございますが、なにが倖せになりますか、京の御番にまいって五年にもなりましたので、出入りの人々にも馴染も出来、親切に世話してくれる者もあるのがなによりでございます。ただ、世間の様子では、組屋敷に、このままおり

ますことが許されるものかどうか、これが心配でございます」

これは、小四郎も、そうとは答えられぬことだった。前将軍慶喜が離れた後の二条城は、水戸藩の家老が預かることになっていたし、幕府の勢力が出水のひくように引き払った後の京都は、町奉行所も廃止となり、薩長を中心とする反対勢力が勝手に支配するようになったことで、どんな圧迫が加えられ、幕府側の施設などは、組屋敷までひっくるめて、明日にも没収され、悪くすると兵隊が入るかも知れないのである。

「小場様のお宿はどちらでございますか？」

この問いにも小四郎は、はっきりした返事が出来ない。

「手前も、ただいまのところは、若年寄の永井さまの御支配下で残れと言いつかっただけで、おる場所も、まだ定まりませぬ」

「……」

「だが、動かせぬ病人とあらば、他のこととは違い、どちらにも斟酌はありましょう。水戸の御家中が残っておるが、どなたか御懇意の方はないのか？」

「それもございませぬ」

「出入りの商人などに、御相談なさるとか？　町の借家に移るようにいまから工夫された方が、御安心かも知れぬ」

話の間に小四郎は、また、さっきの男が店の中をのぞいて外を通ったのを認めた。

やはり、彼はねらわれていた。そして、いまは、釘宮の妻にも敵の注意が向けられていると

いうことであった。

寺町通りを上に歩いて行って、片側の門をくぐって入った。

本堂について入ると、墓地になっていて、葉をふるい落した裸の木が並んでいる。墓石を並べた冬のたそがれは冷たい景色だ。

前を歩いていた町の女房が、土塀の崩れた個所から、裏の路地へ通り抜けるのを見た。同じようにすると見せて、土塀の近くまで行ってから、急に振返った。男はいた。

急に引き返して行こうとするのを、

「おい」

と、声をかけた。

男は、聞えぬ様子で、歩いて行く。こちらを断念して、まだ本屋にいる釘宮の妻女の方に付きまとう場合を想うと、小四郎は、大股で追って行った。

「おい」

とぼけて、怪訝そうにしている顔を向けたのに、小四郎は笑ってやった。

「知ってたのだぞ」

「なんや？」

「どこから頼まれてる？」

けわしく相手は言い返して来た。

「人違いやおへんか？」
「そう頼みたいところだ。勝造とかいう男だったなあ」
それに間違いなかった証拠に、ちらと恐怖の色がのぞいた。
「まあ、いいよ。せっかく来てくれたのだ。帰るにしても、すこし話して行け。こっちからは、なにもせぬわ。反って、めんどうになるとは承知のことだ」
やがて星を生もうとしている夕空が、きびしく冷たく青いのを、小四郎は見た。ひきしまった気分だったが、明るかった。
「おぬしたちは気楽だなあ、すぐに、主人が出来る」
「なに言うてなはる！」
「まあ、腰かけろ。仲善くしておいた方が、お互のためかも知れぬ」
「……」
「いよいよ年の暮れだなあ。どんな正月が来るかだ」
「旦那ア、ずっと京にいなはるのか？」
「わからぬな。いたくないのは、おぬしにもわかるだろう」
「大戦になるんやと。ほんまどすか」
「知らぬ」
素直に答えて、若ものは、夕あかりの中で男が見ても澄んだ好い顔をしていた。
「旦那」

と、相手は言い出した。

「手前だけやおへんぜ。そのうち、戦になるから京に残ってなはる御公儀の御家来が、なにしてるか、調べて知らせろって」

「そうだろう」

まるで他人事のように静かに答えるのが、町の岡っ引の目には、異様であった。

「こっちだって、口惜しいことばかりだ。そのくらいは、お前にもわかっていよう」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com